

参加人数：マテリアルコース3年生 45名

内容を以下にまとめる。

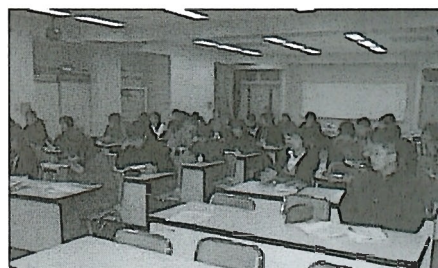
- ・ 地球環境の現況、今後の予測及び課題について
- ・ 排煙脱硫の必要性和現状、実プロセスの説明、問題点
- ・ 排煙脱硝における触媒技術の説明と今後の課題

学生たちも環境保全について日常の中で考えて入るものの、普段の講義と多少方向性の異なった講義であったためか、学生からの質問は多くはなかったが、レポートにあるように、学生たちもいろいろ考えが深まり、大変有意義であったといえる。

3. 学生の感想より

学生の感想はどれも大体同じであり、講演を聴いて環境について理解と関心が深まったということである。以下にいくつかを示す。

- ◎ 今回の特別講演は、排ガス中の硫黄酸化物除去(排煙脱硫)技術の開発、窒素酸化物に関する規制と対策技術についての話であった。(中略)難しそうでよく分からなかったが、その経緯からの教訓や重要なことは参考になると思った。今回のことをこれから生かしていきたい。
- ◎ 今回、横溝忠昭先生の講演を聞いて、排煙脱硫、脱硝技術の原理および開発について学ぶことができ、大変ためになったと思う。普段扱わない生産過程において生じる排ガスについて詳しく知ることができたことは、とても新鮮だった。排ガスは、大気汚染の主要因となっており、以前はたびたび公害として被害を被ってきたため排煙脱硫、脱硝を考慮し、対策をたてることの重要性を改めて認識させてもらった。(後略)
- ◎ (前略)これらのような装置を作る際は、経済性、機能性などを両立しなければならないのでとても大変だということが講演を聴いて改めて確認できました。私も環境問題について多少興味があるので、将来溝口先生のように環境のことを考えた仕事をしたいと思いました。



真剣な表情で講演を聴く学生たち

交通社会実験の計画・実務とその展開

(有) まち交舎 舍主 大澤雅章

社会環境工学科 1年対象 担当教員：田中尚人

実施概要

1月29日(月)3時限目(12:50-14:20)「社会の基礎実験(1年生配当)」においてもものづくり事業による特別講演会「交通社会実験の計画・実務とその展開」が開催されました。

交通まちづくりをご専門とされている(有)まち交舎の大澤雅章氏を講師に迎え、「交通社会実験」と題して、ご講演頂きました。都市計画と交通計画を繋ぎ、人々の交通行動やまちづくりを計画するコンサルタントとしての立場から、実際の現場でのお話など、とても興味深い内容の講演で、学生たちも熱心にノートを取って拝聴しました。

特に、平成14年11月に大分県湯布院町(現：由布市湯布院町)において、大澤先生が手がけられた日本初のパッケージ型交通社会実験に関しては、映像作家が作ったVTRを用いて、現場での苦労や計画と実際の違い、交通社会実験の意義などをお話頂き、ものづくりの臨場感を味わうことができました。

学生たちは、「まちづくり」や「コンサルタント」、「技術士」など、学科に入学した動機に触れる講演を聴くことで、学習の意識を再認識したようでした。講演後、大澤先生のもとへ質問にうかがう学生の姿もみられ、大澤先生は引き続き4時限目の演習にも参加し、熱心に学生たちを指導して下さいました。



私のしごと(栗生総合計画事務所)2003以後 長崎から東京

栗生総合計画事務所 代表取締役所長 岩佐 達雄

建築学科3年次対象 担当教員：両角 光男

実施概要

この特別講演は、環境システム工学科(建築系)の3年次授業科目である「建築設計演習第四」の一部と

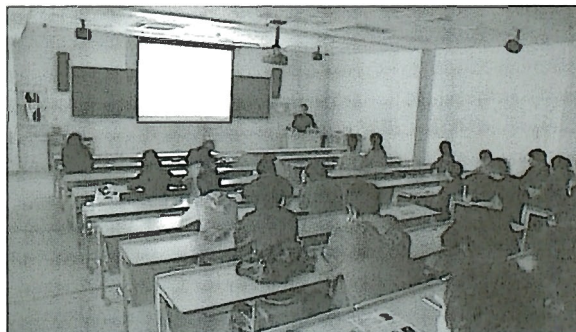
して2007年2月28日(水)に開催された。講演内容が建築作品紹介であり、建築学生全般の関心事であろうとの配慮から、3年生に加えて建築系の4年生や大学院生も受講を可能とした。受講者は学部生30名、大学院生10名、教員3名であった。

講演では栗生事務所の建築作品の紹介だけでなく、建築設計の思想的側面から実務的側面までさまざまなエピソードを交えながら語られていた。実際講演者の岩佐氏は、著名な建築作品を数多く創り出している建築設計事務所の所長を務めている。氏が熊本大学建築学科出身であることから、建築設計の第一線で活躍している大先輩の話の聞けたとあって、受講した学生たちにとってはたいへんな 激になっていたようである。

講演終了後の質疑では、先輩ということも後押ししてか、活発な議論がなされた。

受講者による感想等を以下に記する。

「建築は周りの環境に大きく影響を与える」ということはなんとなく理解していた。今回の講演を聞くことで敷地や敷地周辺の計画が重要であるという考えがよりいっそう深まった。国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・国際花の交流館にしてもその計画は敷地をはるかに越えてその周辺からどのように見えるのかというところにまでおよんでいた。今回の上乃裏通りの課題において自分たちは敷地内での思考に重点をおき、その中で解決することばかりを考えていた点を反省すべきだと改めて感じた。建築は図面から一歩踏み出し建設されだすと、地域や社会に順応し、貢献しなければならないと思う。その点において私が設計する建物は自己満足でしかないものである。実際に建設されたものは、一般の人が使用することが多いので一般の人に認められる設計をする必要があると改めて感じました。(041T1611 大坪慎一郎)



講演の様子

講演会「近作を語る」と課題講評会

長谷川豪建築設計事務所 長谷川豪

環境システム工学科(建築系)3年対象 担当教員: 田中智之

実施概要

平成19年3月17日、工学部1号館6階第二製図室において「近作を語る」と題する講演が開催された。聴講者は約30名。氏は現在最も注目されている若手建築家のひとりである。

講演は最近手掛けた住宅3題に関する解説をベースとし、あわせてその背景にある設計思想、設計手法を紹介するかたちで行われた。

最初に紹介された「森の中の住宅」は、豊かな森に佇むシンプルな切妻型の小建築であるが、その断面に大きな特徴をもっている。全体を形作る切妻のなかに幾つかの小さな切妻空間を配し、それによってできあがる多彩な小屋裏空間を様々なかたちで利用している。続いて「桜台の住宅」では室内化された「中庭」の床が大きな机でもあり、それを家族が囲むというユニークな生活空間である。最後の「五反田の住宅」は三階建ての住宅であるが、隙間をもつ分棟型であり、その隙間はガラスのトップライトと建具により半室内化されている。その建具である扉は高さ約10メートルもある。

これらの作品は明快なコンセプトに基づいているが、そこに矛盾やギャップは見あたらない。普段学生達はコンセプトと建築を結びつけることに四苦八苦しているのが、氏のコンセプトが都市や敷地に対する深い洞察から導き出され、さらには施主との対話を通じて展開し、実際の建築との関係がクリアであることに学生たちはとくに感心していたようである。

講演後には質疑応答が行われ、質問が途切れることなく充実した時間となった。また講演会終了後には設計課題の講評会と懇親会が行われたが、長谷川氏を取り囲む建築談義は深夜まで続いた。

